



石の上にも三年



人間生活科学部 講師 伊藤 博美

2007年にウィーン市の経済会議所でもらった「APPRENTICESHIP(徒弟制度)」という冊子には、様々な職種の見習い年数が記されている。例えば、本屋の店員、ケーキ職人、動物の飼育係などになるには、見習い期間が三年と定められている。

この小冊子を手に入れたのは、職業教育を専門とする研究者からお誘いを頂き、オーストリアにおける工業教育の調査に同行したからである。「随想」欄にふさわしい内容ではないが、なぜオーストリアなのかを説明しておこう。日本でも近年「デュアルシステム」という言葉が聞かれるようになった。かなり大雑把な表現になるが、デュアルシステムとは、学校と現場とが連携し、ある専門職業人を育成するドイツ語圏の仕組みである(『新版 専門高校の国際比較』法律文化社、2006年参照)。ドイツのデュアルシステムを日本に先駆けて紹介した研究者の一人が、佐々木栄一・追手門学院大学教授。この佐々木教授が近年着目しているのがオーストリアということで調査に出かけられ、それに随行した。

オーストリアでは企業内訓練所やHTBL—HöHERE TECHNISCHE BUNDESLEHRANSTALT、職業学校等を見学することができた。自分の研究テーマと異なるとはいえ、教育学の末席の学徒かつ教育の実践者として、座学と実技、理論と実践を同時に学べるデュアルシステムは、とても興味深いものだった。まず、実技を担当する学校教員は、数年ごとにその技術を現場でbrush upしてくるというこ

とに驚いた。日本で言えば、工業高校の専門学科の教員が数年ごとに企業に行くようなものだ。また、見習い期間中のプログラムについて、見習い期間の長いコンピュータのエンジニアから、比較的短い帽子職人まで、約270もの職種について、時代の要請に合うよう国が内容を規定しているということも驚きであった。

さて、携わって丸三年が過ぎようとしている保育者養成機関での私の仕事は、保育や幼児教育の理論を講義する一方、「教育実習事前事後指導」担当者として、実践との間の橋渡しが求められていると感じている。年間約4週間の実習は、保育の仕事を現場で体ごとぶつけて理解できる絶好の機会である。学生は実習を通して大学で学ぶ理論がいかに現場に必要な知識であるかを理解し、また現場で求められる技能(例えばピアノ)を事前に習得する必要性を痛感する。送り出す側として、実習前は心構えや技能的な内容を、実習後は大学での学習や就職への動機づけになるようにと心掛けているつもりである。

しかし、いかんせん微力な私の能力では、学生個人を対象として個々の実習園に応じた事前事後指導をすることはかなわない。いま試行錯誤しているのは、現場へ出かけていき、園の先生方のご意見に耳を傾け、また実習に出かけていった学生達の言葉に耳を傾け、かつそれらを活かし、大学での事前事後指導のプログラムを構築することである。「石の上にも三年」。私の下の石が温まるのはこれからのようだ。



▲裏方の電気技師の見習いについて聞き取りをした、ウィーンのブルグ劇場・かつての皇帝専用入口前にて



マレーシア国立
マラヤ大学総合図書館
University of Malaya Library

人間生活科学部 講師 李 温九

▼マラヤ大学総合図書館 外観



マレーシア国立マラヤ大学 (UM: University of Malaya) は、マレーシアの首都クアラ・ランプールの南西に位置し、中心地から電車で約 20 分の所にあります。広々としたキャンパスは、自然がとても多く、立地的にも環境的にもとても勉強のしやすい雰囲気のある大学でした。大学にはマレー系、中華系、インド系の学生と約 60 ヶ国からの留学生合わせて約 24,400 人が在学している大規模な大学です。

私が訪問したマラヤ大学総合図書館 (University of Malaya Library) は、大学内に設置された 18 の図書館の中の一つです。この大学のモットー、“Ilmu Puncta Kembangan (知は成功の鍵)” でも示しているように、大学内にはこの総合図書館を始め、3つのメモリアル図書館と、イスラム研究、アジア各地の言語研究、人文・社会科学、環境学、ビジネス・会計学、コンピューターサイエンス、情報技術、経済・経営学、教育学、エンジニアリング、外国語・言語学、法学、歯学・医学、自然科学など 14 の専門図書館があり、学生への知的サポートを提供しています。

総合図書館には主に大学から出版された論文や海外からの貴重な書籍が置いてあるため、厳重なセキュリティがな

されていて、入館には学生証を自動改札機みたいな機械に通す必要があります。開館時間はセメスターや休暇期間等によって異なりますが、午前 8 時から午後 10 時 30 分までで、祝日以外は土日でも開館します。大学から許可をもらった人でないと入館できませんが、事前に許可をもらうと一般人でも利用可能です。

私が訪れたときは夏休み中でキャンパスは閑散としていましたが、図書館には多くの学生がいて勉強に熱中してとても刺激を受けました。学生たちの服装は多宗教、多民族の国らしく様々であったことも印象的でした。総合図書館は 4 階立ての建物で 1 階の入り口には毎月の話題の新刊本が展示されていて、学生は本を見ながら時代の流れを感じるとともに新刊の情報も得ることができます。展示されている本のタイトルをみて見ると、社会・経済・歴史・世界地理など様々な分野の本が紹介されていて、中には日本の歴史や自衛隊に関する本もありました。案内してくださった総合図書館の司書 Komodhi Thaveegan さんの話によると、大学の選択科目に日本語があり、日本文化に関心を持つ学生が多くいて、今後は日本に関する本も多く紹介する予定だそうです。

お別れのときの Komodhi Thaveegan さんの言葉はととても感動的でした。“学生はもちろん私たち大学関係者は、この図書館を大学の宝宝箱だと思っていますよ。多くの学生たちが宝宝箱の宝石を利用することにより、自身も宝石のように輝いてほしいです”と、確かに大学の図書館は大学の宝宝箱かもしれません。



▲受付カウンター



▲新刊案内コーナーにて
Komodhi Thaveegan さんと

オスカー・ワイルド 著／曾野綾子 訳

『幸福の王子』

(52 頁) (バジリコ)

サンテグジュペリ 著／池澤夏樹 新訳

『星の王子さま』

(125 頁) (集英社)



経営学部 教授
伊藤 俊雄



「どの作家にも、この一作を書き終えたら死んでもいい、と思う作品があるはずである。もし私がオスカー・ワイルドなら『幸福の王子』はその作品だ」これは、曾野綾子の言葉である。池澤夏樹も同じ思いを抱いたに違いない。

いずれも並々ならぬ熱い思いが伝わってくる新訳である。ともに不朽の名作なのであるから、翻訳するには作品に対する真摯な思いと覚悟を必要とする。その重さに耐えうる力量を自らが自覚できた上でしか為し得ない業と言えよう。

『幸福の王子』は、王子とツバメが紡ぐ無償の愛と自己犠牲の物語であり、『星の王子さま』は、砂漠に不時着した地球の住人であるボクと天から降り自分自身も傷つきながらモラルに関わるメッセージを伝え天にもどって行く王子の物語であるが、人間の神秘は「苦楽一如」を根源としていることに思いが至る。

知の世界に疲れたら心の世界にもどり心の内を見てみたい。幸福になる道、八正道（正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定）は正見から始まっている。

『幸福の王子』も『星の王子さま』もそのことを語っている。見えないもの（心）こそが大切。まさに「色

即是空、空即是色」（形あるものは空で、空が形あるものをつくっている）の真理を語っている。

恥ずかしいことに、私はいずれも原著にふれたことがまだ無い。退職後の楽しみにとっておきたい。



藤井良広 著

『金融 NPO

—新しいお金の流れをつくる』

(241 頁) (岩波新書)



経済学部 教授
野村 重明



学生の皆さんは、マイクロクレジットとかマイクロファイナンスとかいう言葉を見聞きしたことがあるでしょうか。これは、本来は貧困の緩和と生活の質の向上を目的とした貧しい人々に対する無担保融資の仕組みを意味しています。1997 年には、アメリカでマイクロクレジット・サミットが開かれていますから、この言葉自身はそれほど新しいものではありません。

しかし、この言葉にしばしば出会うようになったのは、つい最近のことで、バングラデシュのグラミン銀行の創設者・総裁ムハンマド・ユヌスさんにノーベル平和賞が与えられた 2006 年からのことです（グラミン銀行についてはぜひ坪井ひろみ『グラミン銀行を知っていますか』東洋経済新報社、2006 年をお読みください）。

ここで紹介する『金融 NPO』は、貧困問題だけでなく広く社会・経済・環境問題を視野に入れた様々なマイクロファイナンス—本書は金融 NPO と呼んでいます—の現況を報告した、日本ではほとんど唯一の著作です。著者は現地で取材していますので、その記述は生き生きしています。また紹介されている金融 NPO も、起業支援、地域活性化、自然エネルギー利用、多重債務者救済からホームレス支援にいたるまで多彩なものとなっています。

これらの金融 NPO は、営利を追求する既存の銀行や証券等（＝「営利金融」）とは異なり、金融機能を利用して「意志あるお金」を社会や人のためになる事業・活動に活かすという役割を担っています（＝「非営利金融」）。本書を読むことにより、学生の皆さんにも、従来の営利の金融システムとは異なった金融システムが存在しその重要性がたかまっていること、また日本でのこうしたシステム確立にはどんな課題があるのかということを知ってもらえればいいな、と思います。

読書ガイド

読書ガイドでご紹介した本は図書館にあります。ぜひ一読ください。

松井 茂 記 著

『性犯罪者から子どもを守る
～メーガン法の可能性～』

(265 頁) (中公新書)



前法学部 准教授
柳本祐加子

この本は、3年と少し前に奈良県で発生した幼女殺人事件（いわゆる「楓ちゃん事件」）が提起した、どうしたら子どもに対する性犯罪を抑止できるのかという問題への解決策を探ろうという問題意識から、当時議論的となった、アメリカのメーガン法について解説し、その日本への導入の可否について論ずるものである。

奈良県幼女殺害事件の加害者はそれまで2回、本件と同様、幼女に対する性犯罪を犯し有罪判決を受けたことがあった（その内一件については服役）。であるにもかかわらず、彼の住所を奈良県警が把握していなかったばかりか、新聞配達員という、一般家庭にも業務上出向き、子どもとも接触する機会を持つ職業に従事していた。こうした事実が明らかになるにつれ、保護者たちから、なぜこのようなことが許されるのか。少なくとも子どもに対する性犯罪者について、氏名や現居住地情報などを登録し、公表すべきではないか、といった声が上がった。そしてその実践例であるアメリカのメーガン法が目されるようになったのだ。

メーガン法導入に当たったの論点としては、たとえば、子どもに対する性犯罪者の再犯率、有罪判決を受けた者の氏名をはじめとする個人情報の公開は、その人のプライバシー侵害にならないのか、またこの公開が、その人の社会への再統合の妨げになったり、不合理な差別を受けることに繋がらないか、個人情報公開は有罪判決を受けた者に対する二重処罰に該当しないのかといった、合憲性判断に至るまでの様々なものが上げられる。こうしたこともあり、当時の議論においても、導入に対しては消極的な意見が強かった。

子どもに対する性犯罪が、その被害者に与える心身への損害には、計り知れないものがある。その抑止と、被害にあった子どもへの支援の充実を真剣に考える必要があることは確かである。本書は憲法研究者によるものである。その憲法論的観点からなされたメーガン法の分析、評価、さらに日本への導入を検討する本書は、子どもへの性犯罪に社会がどう立ち向かえばよいのかを考える、よい素材のひとつである。なお本年開催される比較法学会のシンポテーマとしても予定されている模様である。



ジーン・ウェブスター 著

谷口由美子 訳
『あしながおじさん』

(292 頁) (岩波少年文庫)



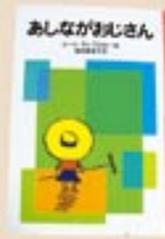
短期大学部 講師
市毛 愛子

昨年度担当した「児童文学」という授業で、「児童文学の名作を1冊読む」という課題を冬休みに出しました。学生が本を読まない、と言われるご時世。ともかく1冊通して読むことを目標にし、それぞれ某か得るものがあればそれだけで上々、という気持ちでした。すると冬休み明け、ある一人の学生が、私の研究室をわざわざ訪ねてきてこう言ったのです。「先生、私を『あしながおじさん』と出会わせてくれてありがとうございます!」と。

今回紹介する『あしながおじさん』は、今からおよそ100年前、1912年にアメリカで出版された児童文学です。これまで何度も映画化・舞台化され、日本でもテレビアニメになり、また、経済的に恵まれない子どもを援助する者としての「あしながおじさん」という名称は広く知られています。原作を読んでいなくても、そのロマンチックなラブストーリーの結末を知る人は多いでしょう。しかし、この本が今も読み継がれている本当の原因はなんなのでしょう。100年前のアメリカ、女性の参政権もない時代の物語。今の日本とは生活様式も価値観もおおよそちがうにも関わらず、この物語は、まさに「出会えてよかった!」と思えるほどに読み手の心に響くのです。私自身、この出来事を通じて、本当の意味で「名作児童文学」とは、いつの時代にも変わらず、人間が生きていく上で遭遇する苦難や問題を乗り越えていくための心を育むものだと思感したのです。

だからこそ、学生みなさんに、“大学”という専門的な学問を修得する場にいるあなた方にこの本を読んでほしいと思います。主人公の孤児ジュディは、幸運にも“学ぶ”機会を得て、大学生活を謳歌します。何事にも懸命に取り組む彼女は、大学での日常や友人との関わりを通して、出自から来る劣等感を乗り越えて自立し、素晴らしい女性に成長していきます。

そして私たちも、主人公たちとともに悩み、笑い、泣くことで、大きく成長することができるのです。そして読後には、児童文学の主人公たちが生涯の心の友になればと願います。



宮本 延春 著『オール1の落ちこぼれ、教師になる』を読んで

短期大学部 犬飼 美紀

人生、何があるかわからない。『オール1の落ちこぼれ、教師になる』は、そう思わせるような1冊でした。中学卒業の学力は漢字は名前しか書けない。数学は九九が2の段まで。英語の単語はbookしか知らない。しかし何故、宮本さんは難関国立大学に入学でき、教師になれたのか。その背景には、沢山の出会いがありました。同級生との再会。就職先の社長や専務。少林寺拳法黒帯の女性。高校の先生方。そしてアインシュタインとの出会い。様々な出会いが宮本さんの支えになり、また夢を与えてくれました。特に、アインシュタインとの出会いが、宮本さんの人生を大きく変えました。物理学に興味を持ち、物理を深く理解するために勉強し始めるのです。そしていつか、難関国立大学入学への夢を持ちます。

中学でオール1の人が難関国立大学へ行くことは、普通の人からすれば無理だと考えるのが当たり前かもしれませんが、しかし、宮本さんは夢を叶えるために暇さえあれば毎日勉強をしました。先生に無理だと言われても諦めずに頑張る姿はとても尊敬できました。夢を持つことは、すごい力を人に与えてくれる、どんなに可能性が薄くても努力すれば夢は叶う、夢が夢でなくなる。人間やる気になれば不可能が可能になることを、この本は教えてくれます。

人生何があるかわからない。人生を変えるような運命的な出会いは、この先あるかわかりません。しかし「塞翁が馬」という諺がある様に、この先の人生で皆さんにも宮本さんの様な運命的な出会いがあるかもしれません。



小池 靖 著『テレビ霊能者を斬る～メディアとスピリチュアルの蜜月～』を読んで

法学部 白井 宏直

細木数子や江原啓之は今でも人気があるテレビ霊能者です。以前も宜保愛子や織田無道、FBI 超能力捜査官からユリゲラーに至るまで、多くの霊能者がテレビを賑わせました。私自身も、一昔前は楽しく見ていました。なぜ彼らは人気を博したのでしょうか。著者は「結婚にしても就職にしても、偶然の要素に左右されていく度合いが増えています。だからこそ、占いや宗教、スピリチュアルといったものに頼りたくなってしまおう。」と語っています。日本の宗教とは変なものです。自然崇拜から来る神道をベースに、仏教や儒教、道教の四つからできています。そのくせ無神論者が多かったり、創価学会やオウム真理教のような新興宗教に興じる者がもの凄く多かったです。亡くなった

家族を供養することを宗教だと思ってない人も多いです。信仰の自由とは本当に自由で、信じるも信じないも自由、何を信じるのも自由なのです。信仰する対象が不安定。だから現代社会人は霊能者の事も信用しきってしまいます。細木について著者は「まっとうでない人生を味わい尽くしたからこそ、他人にはまっとうな人生を生きることを説いているのではないだろうか」と言いました。彼女としては世のため人のためにやっているわけですが、それを信用しきってしまう風潮が、この本を読んだから、私は少し恐ろしくなりました。以前は私も霊能者の事を信じて疑わなかったのですが、著者の小池靖さんにその考えを斬られてしまいました。



ピーノ・アプリーレ 著『愚か者ほど出世する』を読んで

人間生活科学部 亀井 岳

愚か者ほど 出世する。誰もが耳を疑うこの言葉を唱えたのはイタリアのジャーナリスト、ピーノ・アプリーレだ。この本には「バカに関する九つの法則」というものが書かれている。その中でいくつか紹介したいと思う。その中の一つ、知性の終焉「人間は寄れば寄るほどバカになる」という法則である。私たちは集まると愚かな行動をしがちである。サッカーの試合に出てくるフリーガンや、何かを訴えるために集まったデモ隊など。感情的行動を抑えられない集団や、統率のとれない集団などは、ほぼ確実に何かしら問題を起す。冷静に見ると「愚かな行動」と見ることができ。だが、集まれば必ずこのようなことが起きるわけではない。本文を引用するが「科学や芸術や抽象的思考の華やかな業績のいくつかは、小集団によるものだということだ。古代ギリシャのサークルやルネサンス期のサロンから現代の研究者のチームワーク

に至るまで、知的集団の貢献は計り知れないほどなのである。」とある。人間は集まりすぎると駄目だが、必要最小限の人数だと素晴らしい功績を残すことができるのだ。集まると能力を合わせなければ行動できない。能力の低い人が能力の高い人に合わせることはできないが、能力の高い人が能力の低い人に合わせることは可能なのである。また他にも興味深い法則が説明されている。

この本は決して真面目に読む必要はなく、「こんな考え方もできる」という軽い気持ちで読むことのできる本である。序文で養老孟司が言っているように「こういう本のいいところは、固定観念を変えて、脳を開放してくれるところある。」

是非、一度は手にとって読んでもらいたいお勧めの一冊である。



学

生

コ

1

ナ

1

山田真哉 著『食い逃げされてもバイトは雇うなく上』を読んで

経営学部 森 章二

あの ミリオンセラーの『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?』から2年、山田真哉の書き下ろし新作がついに発行。前作に比べて内容、読みやすさが共にグレードアップしている。

今回は上・下巻の2分冊で、上巻では4章構造になっている。1章では「今夜は渋谷で6時53分」と言う題材で、身近な数字をうまく使うコツが。2章では「タウリン1000mgは1g」と言う題材で数字を違う視点から見ることでそれをうまく活用する方法が。3章では本書の題名にもなっている「食い逃げされてもバイトは雇うな」と言う題材で、身近から少し離れた会計上用いる数字の見方や使い方を。最後の4章では「決算書の見方はトランプと同じ」と言う題材で、会社で使われている決算書の

簡単な見方が、各章ともわかりやすくまとめられている。

1章から4章にかけて実に良いステップアップになっている事もあるが、本書は他の書籍に比べ比較的に文字が大きい。更に解説には多数の図表が使われているので大変わかりやすい作りになっている。著者も「1時間で読めて効果は一生」を目指して書いているため、実際私も1時間とまではいかなかったが、1時間30分程度で全て読み終えた。

本書では実社会で役に立つことはもちろん、学校の授業で習う内容以外で生きた会計が学べる。学生には1度目を通す価値がこの本にはあるので、新入生にはぜひ読んでほしい書籍である。



■名古屋経済大学図書館ホームページからのご案内

●以下のインターネット・データベースが新しく導入されました。

▶InfoTrac Custom 250

▶米国等判例・法令データベース (Lexis.com)

▶日本法総合データベース (LexisNexisJP)

▶日経テレコン21

▶Early Education and Development

▶PsycINFO

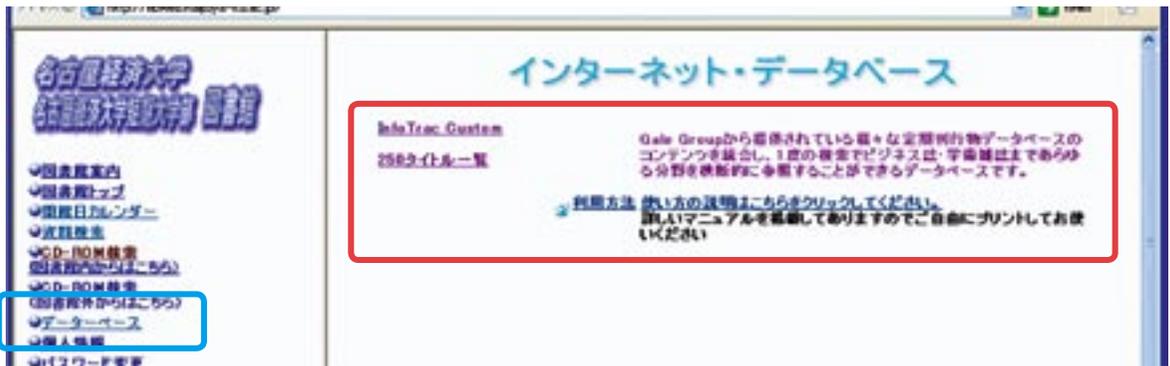
▶医中誌Web

▶JDream II

このほか、既に“MAGAZINEPLUS” “Japan Knowledge” 『D1-Law.com 判例体系』および“KOD”が利用可能です。

〈InfoTrac Custom 250 の利用方法〉

図書館HPのデータベース → **InfoTrac Custom** をクリックすると250タイトルの洋雑誌が検索できます。タイトル(閲覧雑誌)一覧、利用方法等が掲載されていますので、ご確認の上ご利用ください。



図書館2階パソコンコーナー、情報センター、サテライト、および研究室より利用できます。
なお、図書館2階～5階のOPAC検索端末からは利用できません。

■洋製本雑誌（1988年以前）移動のお知らせ

1989年以降の洋製本雑誌は、図書館1階閉架書庫にあります。1988年以前は7号館1階図書室に移動しました。
利用される場合は、OPACで確認のうえ1階・3階カウンターにお申し出ください。

■本学関係者寄贈図書

○19年度に出版された著書、および留学などで外国の絵本などを寄贈いただきました。今後とも新刊発行・留学の際は図書館へのご寄贈をお願いします。

〈新刊図書〉 萩原俊彦著『多角化戦略と経営組織』、本庄資著『アメリカの租税政策』、
大江晋也著『徹底検証役員給与等の税務』他

〈絵本〉 絵本ライブラリー（3号館）の蔵書が充実されました。

『寓言故事』他 後藤基氏、“Dragon” 船井廣則氏、“Balinese children's favorite stories” 他 村田一美氏

○このたび、故末岡好先生（大学初代学長）の『現代日本文学大系』をはじめとする蔵書について、図書館への寄贈を受けました。受入図書の数が極めて多数のため現在整理中であり、配架までかなりの時間を要しますのでご了承ください。

図書館だより Vol.55 2008.4

発行所 名古屋経済大学 図書館 〒484-0000 愛知県犬山市樋池 61-22 TEL (0568) 67-3798 (代)
名古屋経済大学短期大学部 ホームページ <http://www.nagoya-ku.ac.jp/lib/index.html>
発行 年2回
印刷所 株式会社 一誠社 TEL (052) 851-1171